

平成 30 年 4 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370551

研究課題名(和文) 語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究課題名(英文) Asymmetry of lexical conceptual expansions and semantic change

研究代表者

岡田 禎之 (Okada, Sadayuki)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：90233329

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：語彙概念拡張は主要な参与者において生産的に認められ、その一部の拡張的意味が周辺の参与者にも認められていく、という意味変化の広がり(意味の浸透)が認められる。このことは、述語の項位置にある名詞と付加詞位置にある名詞の概念拡張の非対称性に認められるばかりではなく、2語でできた連語表現の右側主要部位置と左側の修飾語位置の比較においても認められる。

歴史的なデータの調査はまだ不十分であり、満足な結果には至らなかったものの、当初予定していた使用環境(叙事的な使用環境)のみならず、修飾的環境においても、同様の非対称性が英語においても、日本語においても認められたことは、このプロジェクトの成果であった。

研究成果の概要(英文)：The conceptual expansion of nominal expressions is more likely to be attested in argument positions of predicates than in adjunct positions. Moreover, the same kind of asymmetrical distribution is found in the context of two-word combinations: the extended meanings attested in the head position (namely, the right-hand member) of word combinations are more varied than those found in the modifier position (namely, the left-hand member). Those asymmetrical distributions found in the two distinct contexts of use indicate that the conceptual expansion of nominals is likely to start in the positions of central participants and permeate to peripheral participants.

The historical research on the semantic change of nominals is still under way, but the discovery of the asymmetrical distribution, not only in the context of sentential predication but also in the context of modification (or, word combinations) is true of both English and Japanese. This is the main result of the project.

研究分野：英語学

キーワード：語彙概念拡張 メタファー メトニミー 非対称性 意味の浸透

1. 研究開始当初の背景

名詞がその通常の指示対象の範囲を超えた事物を指し示すとき、名詞の概念拡張が行われていると考え、これはメトニミーの一種であるといえる。どのような概念拡張が生産的であるのか、どのようなメカニズムでこの概念拡張が行われるのか、といった問題は、様々な学者が研究してきている。しかし、どのような統語環境において概念拡張が生じやすいのか、といった構造的認可の問題は筆者が知る限りほとんど研究されてこなかった。管見の限り、Waltereit, Sweepなどが論じているのみである。彼らは、直接目的語位置が生産的に概念拡張を生じる場所であるとして特別視している点で一致している。しかし、この一般化には様々な反例が認められ、より広く「項として選択された要素であるか否か」という観点から考察することで、より例外の少ない一般化ができると考えられる。このような問題意識から、どのような環境において概念拡張が生じ、どのようなルートでその他の環境へとその拡張義が浸透していくのか、という問題を考察したいと考えた。

2. 研究の目的

Langacker の言う参照点構造の一種であるメトニミーは、論理的な指示対象物を直接言語化して指し示すのではなく、これを指示するための参照点となる要素を言語化しているものであり、認識的に salient な部分が言語化される、と考えられている。同様に salient な文内参与者であるならば、その言語表現のその特定の言語文脈における具体的な指示対象の決定に労力を注ぐことは不自然ではないはずであり、文内で重要度の高い参与者は概念拡張の対象になりやすい、と考えることも可能である。このような見地から、項・付加詞の非対称性という統語論の世界では卑近な概念を用いて語彙概念拡張の問題を考えてみる。修辭的な意味の世界の現象と思われていた研究対象に形式的な特性を絡めることで意味拡張の一般的方向性を洗い出せるのではないかと、という目的のもとで研究調査を行う。

3. 研究の方法

(1)筆者はまず英語・日本語それぞれの30個の名詞に関して、項位置の用例250と付加詞位置の用例250の合計500例ずつを集めて、それぞれ項位置の字句通りの解釈、項位置の概念拡張解釈、付加詞位置の字句通りの解釈、付加詞位置の概念拡張解釈の用例に分類していき、特にとに関してそれぞれの解釈に応じて細かく用例を分類していった。するとの解釈の範囲がの解釈の範囲を含み込む、または等しい、もしくはは

あっても、は存在しないといった分布パターンを形成する事例がほとんどであった。逆にには存在しない意味解釈が認められる例は少ない。このような分布特性は、概念拡張は項位置における解釈の拡張をもとにして、これが慣習化し、付加詞位置にも同様の解釈が認められるようになる、という筆者の考え方をサポートする結果になる。少なくとも、逆に付加詞位置から概念拡張が生じて、項位置に浸透していく、という方向性ではないことが明らかになる。

また、OED や日本国語大辞典などで、当該名詞の拡張義がいつごろからスタートし、項位置、付加詞位置のどちらの用例が掲載されているのかを調べていくと、多くの場合、項位置での用例が古くから掲載されていることがわかり、このことも筆者の仮説をサポートしてくれるものになると思われる。

(2)(1)の初期調査で得られた結果をもとにして、語義として定着した慣習的解釈として認定すべき意味がどのようなものであるかについて考察することも可能になる。辞書類で語彙項目の意味として認定されている意味の範囲と、項、付加詞に関係なく成立する意味解釈の範囲がどの程度符合するのかを調査する。単語の意味として充分定着したと見なせるものが、辞書類に語義として記載されているのであれば、辞書編纂者たちが直感的に語義として認めた内容と、コーパスで実際に得られた用法分布の間には、充分な相関が認められるのではないかと考えられる。

項位置においてしか認められない解釈は、用いることができる環境が制限されているものであり、逆に言えば、その名詞の意義として十分に確立していないということにもなる。その名詞の意義として慣習化している度合いが高ければ、特定環境に制限されることなく自由に生起できるはずであり、項・付加詞の両方の位置で認められる解釈が語義として安定し、したがって辞書にもその語の意義として認められる可能性が高いと考えられる。英語と日本語の辞書類で、調査対象とした名詞の語義として掲載されている意味を確認していき、コーパスでの分布状況とどのように関連しているのかを確認していく。ここでは統計処理によってその相関性を見ていく。

(3)もう一つの調査として、2語でできた連語表現において、調査対象の名詞が主要部要素として用いられる場合と修飾部要素として用いられる場合の意味を辞書で調べ、その意味解釈のバリエーションを比較するという調査も行う。ここでも非対称性が認められ、叙述的環境(文の述語の項か付加詞か)における解釈のバリエーションの違いと並行的な分布を見せるかどうかを確認していく。このために、英語・日本語の辞書に記載されている2語からなる連語において、調査対象の

名詞が右側要素（主要部要素）として用いられている場合の意味解釈のバリエーションと、左側要素（修飾部要素）として用いられている場合の意味解釈のバリエーションを比べていく。敘述的環境（文内で述語の項として用いられるか、付加詞として用いられるか）と、連語的環境（連語表現において、主要部要素として用いられるか、修飾部要素として用いられるか）という2つの異なる使用環境での概念拡張がどのような分布を示すかを検討していく。そして、この2つの環境において、並行的な分布が認められ、主要参与者と周辺的参与者では、前者のほうが拡張義のバリエーションが豊かであることが分かれば、この分布も概念拡張解釈がどのように発動し、どのように浸透していくのかを知るうえで、一つの大きなヒントを与えてくれるはずである。

4. 研究成果

まず上記 3-(1) に関しては、論文(4), (5), (6) および研究発表(5), (6), (7) がその成果である。英語・日本語の一般名詞類 30 個ずつを HandI のコーパスデータ調査を参考にして選び出し、項位置と付加詞位置における拡張義の分布を確認すると、項位置での拡張義のバリエーションが広いものが多く、逆に付加詞位置において項位置に認められなかった解釈が現れる事例は非常に少なかった。これらの例外的事例に関しても、OED や日本国語大辞典の記載例を見ると、古くから項位置での用法があったことが確認できる。現代では付加詞位置での用法が発達し、データサンプル内でもその様な事例しか認められないものであったとしても、時代をさかのぼれば、項位置において当該の拡張義が認められたことは、筆者にとっては有意義であった。この調査から得られた結論は以下の3つであった。

(i) 項から付加詞に意味拡張が浸透していくという方向性が支持されているのであって、少なくとも逆の方向性で意味が拡張していくパターンが生産的なわけではないだろうということ。もちろん、ここで扱ったのはそれぞれの名詞に関して 500 事例ずつ、というごく小規模な分布調査でしかなく、これによって 30 の名詞の意味分布の全容が決定されるなどということは全くない。しかし、いくつかの異なる名詞に関しての調査を繰り返していくことから見えてくる全体の傾向というものには、それほど大きな誤差はないのではないかと考えられる。

(ii) この拡張パターンの方向性から考えられる一つの可能性として、まず項位置において特定の解釈が固定され、これが定着することによって、この文脈から独立した付加詞位置でも利用できるようになっていくというストーリーが有望であると考えられる。た

だし、これは歴史的な資料によるサポートが必要であり、今後の検証が必要となる。

(iii) このような概念拡張は、英語や日本語という特定言語にしか認められないということは不自然であると思われるため、他の言語の場合にも同じような概念拡張のパターンが認められるのかどうかの検証が必要である。そうすることで、一般的、普遍的な概念拡張のパターンを確立していくことができるのではないかと、と思われる。

3-(2) に関しては、論文(3) および研究発表(4) がその成果である。英語の語義調査対象となった 30 個の名詞表現に関しては、それぞれ 12 種類の英英辞典で記載項目を調査し、日本語の語義調査対象となった 30 個の名詞表現に関しても、同じく 12 種類の国語辞典を利用して調査を行った。

論文(4) で集めた各名詞の拡張解釈の分布を元に、これに追加データを加え、項位置と付加詞位置とともに確認できた拡張解釈、項位置のみに確認できた拡張解釈、付加詞位置のみに確認できた拡張解釈をとりまとめ、それぞれが各辞書類で当該の名詞表現の語義として認定されているかどうかを確認していった。

ここで建てた仮説は以下の(A), (B) 2 つであり、これらが言語データによって支持されるかどうかを考察した。

(A) argument/adjunct 位置ともに確認できる拡張義が、argument 位置においてのみ確認できた拡張義よりも語義としての定着が進んでいるのであれば、前者の辞書記載率は後者よりも高くなると考えられる。

(B) argument/adjunct でともに確認できることが、語義の定着と相関しているのであれば、使用頻度の高い拡張義であることが、辞書記載率を上げるファクターとして重要なのではなく、使用頻度の少ない語義であっても、argument/adjunct にともに確認できた語義は記載率が高くなると考えられる。

辞書記載項目を確認していくと、上記の 2 つの仮説はともに統計的に妥当な仮説であるということが保証された。これまで辞書執筆者が直観的に捉えてきた単語の拡張義というものが、実際の用例分布およびそれが項・付加詞のどちらの位置において用いられているか、ということとの相関が認められるのではないかと、ということこれまで考えられてきたことはないものと思われる。とくに、使用頻度の多い拡張義が記載率が高くなるのは当然としても、頻度の低いものであっても、出現環境が制限されず、語彙の拡張義として定着度が高いと思われるものであれば、記載率が落ちないということは興味深いことではないかと考えられる。

3-(3) に関しては、論文(1), (2) および研究

発表(1),(2),(3)がその成果である。叙述的文脈には項・付加詞位置での使用があり、連語的文脈には主要部、修飾部位置での使用がある。最初の項位置であるが、ここでは述語に選択されることによって与えられる意味的な選択制限があり、また名詞句内でも当該の名詞表現は主要部として機能することから、限定修飾要素からの追加的な意味制限が与えられ得る。さらに、この位置の名詞要素は文が叙述する出来事の中心的参与者でもあるため、文脈に即した適切な拡張解釈を得るための処理労力を集中的に割くに値する参与者である。意味解釈を得るための選択制限的情報も十分に提供されている環境でもあることから、この位置は新規の拡張解釈を生じるには理想的な環境であると考えられる。

つぎに付加詞位置は、叙述的文脈という観点からは周縁的要素であり、その概念拡張のための選択制限などの意味的情報は期待できない位置であるが、一方で当該名詞句内では主要部位置の要素であることから、この名詞を限定修飾する要素が付加されることは充分ありうる。この環境は、連語的文脈における主要部要素の場合とほぼ変わらないものであると考えられる。どちらの場合も、名詞句内に話を限れば中心的要素であり、拡張解釈を得るための意味的な制限を受ける側の要素であると言えるので、項位置に次いで拡張解釈を得やすい環境であると考えられる。

最後に残された使用環境は、連語的文脈における修飾部位置であるが、この位置では名詞表現はどこからも意味的な限定を受けることができない。名詞句内でも周縁的要素であり、また叙述的文脈で考えたとしても、主要部要素でないことから、述語に選択される要素ではない部分であり、周縁的要素でしかありえない。したがって、拡張義を得るための処理労力をかけることが期待できない位置である。この位置には、述語や限定表現から得られる意味制限が存在しなくてもアクセスすることが可能な、かなり慣習化の進んだ語彙的な拡張義が期待されることになる。その分、生起できる意味解釈のバリエーションは狭められることになる。

以上のように、項位置>付加詞位置、主要部位置>修飾部位置という拡張義のバリエーション分布が認められ、英語でも日本語でも同じ傾向が認められた。このことは、主要な参与者から周縁的な参与者へと拡張義が浸透していくということが、文レベル及び語レベルの2つの環境において並行して認められることを示しており、筆者が想定する拡張義の浸透の方向性をさらにサポートするものとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

- (1) 岡田禎之「身体部位名詞の概念拡張と連語環境における意味分布の初期調査」『ことばのパスpekティブ(中村芳久教授退職記念論文集)』査読なし. 東京:開拓社. 2018. 174-185.
- (2) 岡田禎之「叙述文脈と連語文脈における概念拡張分布の相関について」『待兼山論叢』第51号 文化動態論篇. 査読なし. 大阪大学文学会. 2017. 1-19.
- (3) 岡田禎之「拡張概念の定着化と項・付加詞の解釈分布について」『認知言語学論考』No.13. 査読あり. 東京:ひつじ書房. 2016. 107-137.
- (4) 岡田禎之「日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』第56号. 査読なし. 2016. 21-60.
- (5) 岡田禎之「名詞の語彙概念拡張と歴史的変遷に関する初期的調査」『言葉のしんそう(深層・真相)---大庭幸男教授退職記念論集』査読なし. 東京:英宝社. 2015. 597-608.
- (6) 岡田禎之「名詞の語彙概念拡張に認められる非対称性」『待兼山論叢』第47号. 文化動態論篇. 査読なし. 大阪大学文学会. 2013. 41-62.

[学会発表](計7件)

- (1) OKADA, Sadayuki "The Asymmetry of Conceptual Expansions in Predicational and Modificational Contexts." Corpus Linguistics 2017, University of Birmingham, 2017.7
- (2) OKADA, Sadayuki "Conceptual expansions of body-part nouns and their distributions in predicational and modificational contexts." Workshop on Nominalization at UCLA, University of California, Los Angeles, 2017.3.
- (3) 岡田禎之「身体部位名詞の概念拡張と語の連接関係について」日本英語学会第34回大会シンポジウム「意味・機能の変容の諸相」司会および講師として 金沢大学 2016.11
- (4) OKADA, Sadayuki "Lexicalization of extended references of nominals and argument-adjunct asymmetry" UK Cognitive Linguistics Conference 6, Bangor University, Wales, UK. 2016.7
- (5) OKADA, Sadayuki "Asymmetrical distributions in Nominal conceptual expansions" 13th International Cognitive Linguistics Conference (ICLC13), Newcastle Upon Tyne, UK. Northumbria University, 2015.7.
- (6) 岡田禎之「日英語の語彙概念拡張に関する

る一考察」日本英文学会北海道支部大会
招待講演（北海道武蔵女子短期大学）
2014.10

- (7) 岡田 禎之「日英語の名詞概念拡張と項・
付加詞の非対称性」大阪市大英文学会(大
阪市立大学)シンポジウム「意味と形式
の対応を考える」講師として 2013.11

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡田 禎之 (OKADA, Sadayuki)
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：90233329